Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま

縄文土器を超えられるか！

東京都埋蔵文化財センター報 71

「縄文土器作り教室」雑感

当センターが広報普及事業の一環として「縄文土器作り教室」を始めたのは、今から20年前の昭和61年のことです。今日では歴史系の博物館などが行う行事の中では、縄文土器作り教室は目玉商品的な催し物となっており、当センターでも毎回多数の応募者があるため、これまで中断することなく続く長命の行事となっています。ところで、何が契機となってこの教室が開催されるようになったか、その経緯については今まったく記憶に残っていません。当時、縄文土器作りといえば千葉市の加曽利貝塚博物館が始めた縄文土器の製作実験があり、これに触発されたかのように、縄文土器を作ってみるといった試みが各地の博物館などで行われるようになっていましたので、当センターが始めた土器作り教室も、このような動きと無関係ではなかったのではないかと思います。それでも研究者が行う製作実験と違って、一般の人たちが参加して行う土器作り教室ともなれば脱線することもままあるものと危惧されたため、この教室を始めるにあたっての感想を、本紙No.10（昭和62年3月31日）に以下のように記したことがあります。

「‥‥この人気にも気になることが1つある。それは、土器作り教室が単なる陶芸教室になりかねないのではないかということにたいしての危惧である。博物館や当センターのような機関がおこなう土器作り教室は、現代的な陶芸感覚で土器を作り、その出来栄えを競う場を提供することにあるのではなく、あくまでも当時の土器がどのようにして作られたかを自らタイムスリップして体験する場を提供することにあると考えられるからである。くれぐれも脱線することがないよう戒めたいものである。」

20年たって読み返してみますと、危惧したような脱線がまったく起きていなかったわけではありません。数ある参加者の中には、モデルとして置かれた目の前の縄文土器にはおかまいなく、自らの創作に走る人たちが少なからず存在したからです。実物の縄文土器をモデルにして縄文土器を作ってみることの意義は、目の前にある土器の作者は何を考えながらこれを作ったのか―例えば、どれぐらいの太さの粘土紐を積み上げ、どんな道具を使って細部の形を整え、どんなタイミングでどんな施文具を使ってどんな手順で文様をつけたのか等々―、縄文土器の作者になったつもりであれこれ考えながら、できるだけ正確に縄文時代の土器作りを追体験してみることにあると考えられるからです。もしそうでないとすると、一般の陶芸教室と何ら変わるところがないということになってしまうのではないでしょうか。

ところで、当センターが行う縄文土器作り教室では、他の施設では体験することのできないことがあります。それは、縄文時代の人たちが使ったのと同じ粘土を使って縄文土器を作ることができるということです。多摩ニュータウン遺跡群では、縄文時代の粘土採掘坑が調査されていますので、当センターの縄文土器作り教室ではそこから採取された粘土を使っています。正確にはテラコッタを1/2ほど加えていますので、縄文土器とまったく同じ素地とはいえませんが、それでも可塑性のある非常に使い勝手のよい素地に仕上がっています。

私もこの素地を使って 初めて気付いたことがあります。可塑性に富んだ素地と可塑性に乏しい素地とでは、その性質が土器作りのあらゆる工程に影響を及ぼすため、素地が違えばまったく違った土器作りになってしまうということです。例えば、1000度以上の高温で焼かれる陶磁器では耐火性のある素

地であることが絶対条件となるため、作りやすさの条件となる可塑性は二の次になっています。それに比べて、600～700度の低温で焼かれる縄文土器では耐火性は必要ありません。そういう粘土であれば容易に入手できたはずですが、粘土採掘坑での調査所見では、縄文人はただ作れる程度の粘土では満足せず、あくまでも良質で使いやすい粘土を探して、それが見つかるとその粘土だけを狙って徹底的に採掘していたのです。そこには可塑性と粘性の備わった非常に良質の粘土へのこだわりを見ることができます。そして、このこだわりが、縄文造形の特徴ともなっている細い粘土紐を貼付した文様や精巧な把手の加工を可能にしたものと考えられます。いずれの焼き物にとっても土は非常に重要視されますが、その観点は陶磁器と縄文土器とでは大きく違っていたのです。素地が異なれば土器を作る技術も違っていたのではないかということになります。

ここで悩ましい問題が生じることになります。私たちが実際に縄文土器を作ってみるという場面では、往々にして現代の陶芸の技術が参考にされていますが、縄文土器の技術と現代の陶芸の技術とが果

たして同じであったのかということです。たとえ、現代の陶芸の技術を参考にすることによって失敗することが少なくなったとしても、土器を作る技術が違っていたのでは、縄文時代の製作法によって再現された作品とは言えないことになるからです。

まだ縄文土器作り教室の現場では、このことについての踏み込んだ議論はなされていないようですが、今後ともこの事業は盛んになることはあっても廃ることはないものと考えられますので、願わくは20年前の危惧が杞憂であってほしいものです。

（可児）

1．教室の前の下準備。粘土に砂を混ぜよくこねる。これがなかなかの重労働。

2．土器作り教室の始まり。はじめに簡単な説明。ちゃんとできるかちょっと緊張。

3．底から順番に一段ずつ粘土紐をていねいに積み上げていきます。

4．本物の土器を見本に作ります。なかなかいい感じで出来上がってきています。

5．みんな真剣。大人は3キロの粘土を使って本格的に作ります。

6．文様をていねいにつけて完成まぢか。本物に負けないいい出来かな。

圏央道あきる野I.C～八王子J.C.T開通記念
圏央道関連遺跡の紹介

平成19年6月23日、圏央道（首都圏中央連絡自動車道路）あきる野I.C～八王子J．C．T間が開通し、中央道と関越道がついに直結されました。

東京都埋蔵文化財センターでは、平成６年６月から三吉野遺跡群（現あきる野I.C）を皮切りに、圏央道建設に関連する遺跡の調査をすすめてきました。

この度の開通を記念して、圏央道建設に直接関わった遺跡を紹介します。

4 八王子市　川口町十内入東遺跡
八王子市川口町

○調査範囲内に全面展開した縄文時代の陥し穴

丘陵内部にオオタカの住む川口丘陵が、川口川に向かって張り出す尾根の先端部分、川口川が形成した河岸段丘面と段丘の緩斜面上に立地する。周辺は、北村透谷がかつて「幻境」と呼んだ緑豊かな田園風景を今にとどめている。

調査によって縄文時代、古代、中・近世の痕跡が確認されている。縄文時代早期後半においては、総数306基にのぼる陥し穴が構築された「狩猟域」を形成し、中期後半では住居跡が営まれた「居住空間」として、建物跡や掘立柱建物跡、墓壙等が構築された、中世から近世にかけては「墓域および居住空間」として、さらに井戸や多数の墓壙が形成された近世から近・現代においては「農耕空間・墓域」として、それぞれの時代における「空間」の役割の変遷に対応しつつ、この地が連綿と利用されてきたことを窺い知ることができる。

5 八王子市　美山町赤根遺跡
八王子市美山

○縄文時代中期の集落の一部と古代の鉄製品製作集団の生活痕跡を確認

小津川が形成した低位段丘面に位置し、A～D地区の４地点が調査されている。

A地区では、狭い範囲で勝坂式期をはじめとする縄文時代中期の住居跡が５軒と、集石と呼ばれる調理用施設多数が検出されている。また、斜面部からは多量の土器や石器が出土する「土器捨て場」も見つかっており、縄文集落の一端が明らかになっている。

C地区では、10世紀頃の古代の住居跡が狭い範囲で14軒発見されている。付近からは鉄製品や鍛錬滓などが出土しており、小さな集落内で小鍛冶を営んでいた生活痕跡もうかがえる。

(C) Shobunsha Publ

1 西多摩郡日の出町　三吉野遺跡群
西多摩郡日の出町大字平井字三吉野

○西多摩地域有数の古墳時代集落跡

秋留台地北側縁辺の中央部に位置し、多摩川の支流である平井川の右岸に面している。東側には天神前遺跡や約50基の古墳が確認された瀬戸岡古墳群が隣接する。

調査では、古墳時代後期の住居跡36軒が確認され、土師器や須恵器の他に、紡錘車、玉類等を含む土製品、石製品が多数出土したことから、秋留台地を開拓し瀬戸岡古墳群を遺した集団の生活が明らかになった。また、焼土土坑や焼成粘土塊が発見されたことにより、集団内での土師器生産の可能性が示唆されている。

古代では、鉄製馬具（轡・くつわ）や大規模な区画溝が検出され、牧（牧場）の経営に関連したものと考えられている。

2 あきる野市　天神前遺跡・瀬戸岡古墳群・上賀多遺跡 新道通遺跡・南小宮遺跡
あきる野市瀬戸岡天神前ほか

○天神前遺跡において日の出町三吉野遺跡群に続く古墳時代の集落跡

多摩川の支流である平井川の右岸、秋留台地北側縁辺に沿って位置し、西側には日の出町三吉野遺跡群が隣接している。

天神前遺跡の調査では、古墳時代の住居跡６軒、焼土土坑１基、古墳石室１基が確認され、三吉野遺跡群の調査で確認された、秋留台地の開発に携わった人々が形成した集落の東端部が明らかになっている。

瀬戸岡古墳群においては、古墳１基のみの調査であったが、半地下式による石室の構築方法、構造、墓道の様相等から、駿河地方の群集墳に酷似していることが判明した。

3 あきる野市　代継・富士見台・西龍ヶ崎遺跡
あきる野市下代継地内・油平地内・牛沼地内

○代継・富士見台遺跡にて、古墳時代前期の集落跡

東側に北西から南東に流れる多摩川と、その支流である北側の平井川、南側の秋川とに三方を挟まれた秋留台地の中央部分南縁に位置し、秋川によって形成された河岸段丘上の立川面に代継・富士見台遺跡が、その南方の一段低い段丘面上に西龍ヶ崎遺跡がそれぞれ立地する。

代継・富士見台遺跡では、縄文時代草創期から後期の遺物が多く発見されており、中期の住居跡の存在とともに、台地の南側縁辺部に当時の生活の痕跡がうかがえる。また、古墳時代前期の住居跡18軒と掘立柱建物６棟がそれぞれ発見されており、秋留台地の開発に着手した、当時の集団の生活を垣間見ることができた。

龍ヶ崎遺跡においては、第４・５次の調査が行われ、縄文時代早期から晩期の遺構や遺物が確認された。特に、石器の製作跡や単独であるが、晩期の土器が発見されていることは特徴的である。

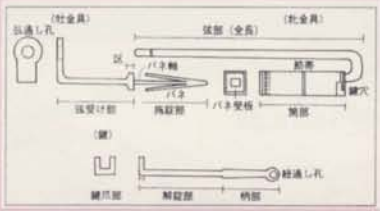
ations.Inc. All rights reserved.

くろがね物語 十一

古代の鍵

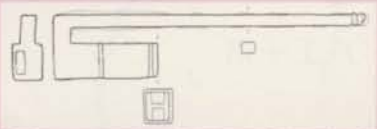
今回取り上げる鉄器は、鍵(かぎ)です。遺跡からはごく稀にしか検出されませんが、極めて重要な遺物です。近年、合田芳正さんの精緻な研究により、中国から日本へ伝わった鍵のルーツが明らかにされています。一般的な古代のカギは錠前(じょうまえ)と鍵に分類されます。錠前は、鉄棒の先端に鍵穴を開けた箱形の筒部が付くもの（牝金具）と、環付のＬ字形金具の先端に、軸をもつバネを取り付けたもの（牡金具）から構成されています。バネを筒部に挿入することで、施錠される仕組みです。これを開錠するためのものがまさに鍵で、鍵穴形に作り出した鍵爪をもつ鉄器がそれです。

錠前には、様々なサイズがありますが、大型のものは倉に使われたと考えられます。奈良東大寺の正倉院校倉は、天皇直筆の封紙を結び付けた錠前で封鎖されていました。これを勅封(ちょくふう)といって、原則として天皇の許可なしには開けられないものでした。鍵は当然、貴族や役人が多く居住する平城京跡や武蔵国府近辺からは多く発見されています。ところが、意外なことに丘陵の古代村落からもれっきとした鍵が出土するのです。多摩ニュータウンNo.503遺跡では、錠前の牝金具が見つかり平安時代のものとわかりました。村には大事なものを納めておくための建物でも存在したのでしょうか。万葉集の「貧窮問答歌(ひんきゅうもんどうか)」にあるような、貧しく、疲弊(ひへい)した農民の生活描写からはとても想像できませんが。（松崎）



鍵の名称 （合田1998「古代の鍵」より）

正倉院の鍵


多摩ニュータウン遺跡No.503遺跡出土の鍵

保存科学室だより

今回は、新宿区教育委員会から保存処理を依頼された漆器類について紹介いたします。

処理の対象は、江戸時代の墓が多数調査された法正寺遺跡の84号墓副葬品で、蒔絵を施した箱（蓋・身・入子）と中に納められていた蓋物（蓋・身）および鉄漿盥の計6点です。女性が用いた化粧道具と考えられ、被葬者の性別や身分、さらには葬送儀礼や装飾文化を考える意味でも貴重な資料です。

資料受入れは今年の1月末でしたが、展示予定から逆算して、6月下旬までの約5ヶ月で処理を行い、7月上旬に返却することにしました。また処理前の道具箱蓋には、両隅に何かが当たったような約2cm大の穴があり、その周囲は腐食して、場所によっては漆膜だけになっていました。これを通常通りに処理すると、最悪の場合分解してしまう恐れがあったため、蓋と入子については、石膏で内型を製作して保護しながら作業することにしました。

木製品の保存処理は、多量に含んでいる水の代わりに樹脂を含浸させて行います。化粧箱の身以外については、ＰＥＧ（ポリエチレングリコール）を含浸させました。常温で20%のＰＥＧ溶液に漬込むことから始めて、2ヶ月半をかけて約55%まで濃度を上げ、4月中旬からは60℃に加熱した含浸槽に入れ、さらに2ヶ月半かけて100%までＰＥＧを含浸しました。取り上げ後は、木質がなくなっている部分を樹脂で補うなどの仕上げ作業を行い、無事保存処理を終えることができました。

化粧箱の身は青銅製の飾り金具が付いていたので、処理後の錆を防ぐため、水に溶けないセタノール（高級アルコール）で含浸処理を行いました。

処理を終了した資料は、新宿歴史博物館で開催中の「新発見遺跡展'07新宿の遺跡」で10月14日（日）まで展示されています。（上條・長佐古）

シリーズ

「縄文の村」四季折々

夏の濃い緑に覆われた復元住居

縄文の夏は忙しい。遺跡庭園内は夏繁る雑草との闘いでもある。実は現代人が雑草と呼んでいる中に、縄文人の生活に欠かすことのできない草が数多く存在する。カラムシ、アカソ、イラクサそしてクズなど、茎の皮から紐・糸・縄の素材となる長くて丈夫な植物繊維が採れる草たち。良質な繊維を採るのは夏の暑い季節が旬。この時期を逃すと繊維が弱くなり質の悪いものしか取れなくなる。縄文人も暑い夏の一日、額に汗しながら一生懸命草刈をしていたことをちょっと想像してみてください。

刈り取った草から繊維をとる方法は３種類。草を10日ほど水に浸けて腐らせる方法（クズなど）。道具を使って皮を剥ぐ方法（カラムシなど）。茎を乾燥させてヨコヅチなどで叩いて繊維を採る方法（アカソなど）。先日開催した「編布作り教室上級編」では、この３種類の方法で繊維を採り、糸を紡いだ。植物から糸が採れるという事実は、化学繊維の既製品で全てが揃ってしまう現代生活の中では、ほとんど想定外。糸などはあまりにも当たり前すぎてその存在すら意識されなくなっている。ここに縄文生活の基本が見える。

昨年に続き庭園内の一画にソバとエゴマを蒔いた。夏盛りと勢い良く成長している。縄文時代のソバについては残念ながらはっきりした出土例は確認されていないが、白い花がきれいなので植えている。エゴマは、青森県の三内丸山遺跡、福井県の鳥浜貝塚や長野県の荒神山遺跡などからその種子が発見されている。縄文人はエゴマをどのように利用したのだろうか。エゴマはしそ科の油脂植物で、その種子から搾られた油は食用、燃料、塗装用などに広く利用され、なたね油が江戸時代後期に普及するまでは全国的に栽培利用されていた。どうやらその初源が縄文時代にまでさかのぼるようである。

現在は東北地方の一部で「じゅうねん」と呼ばれ伝統食品として栽培され、健康食品としても見直されている。ただし、近年商品として流通しているもののほとんどは中国産の輸入品。縄文エゴマの復活が望まれる。

木の実を主食とする縄文人にとって、夏は食料が最も不足する厳しい季節。昨年の秋に採取した木の実は、穴を掘って貯蔵したり、土器でゆでたものを火棚の上で乾燥保存したりして食べつないできたが、それもそろそろ底をつき始める。頭上に実り始めたトチノミがまちどおしい季節でもある。

遺跡庭園の復元住居内の炉では、防腐と防虫を兼ねて連日火焚きを行っている。全国の数ある復元住居でも、管理上の問題から実際に火焚きを行っているところはほとんどない。住居内で焚かれた火を見つめているだけでも、臨場感が出て雰囲気がいいと非常に好評。「縄文の村」の特徴でもある。

しかし、この火焚きの作業、夏は地獄でもある。外気の気温が30度を超えると、住居内は40度をゆうに超える。ほとんどサウナ状態となり、中に居続けることができない。果たして縄文人は火を焚き続けていたのだろうか。おそらく室内の炉はおき火程度で、夏の調理は家の前の木陰で行っていたに違いない。体感して初めてわかることがある。

本日、熊谷で40.9度の最高気温を記録。縄文の夏も暑い。

（小薬）

最盛期のカラムシ

もうじき実をつけるエゴマ

昨年の秋にドングリを貯蔵した穴

体験教室

古代のアクセサリーを作ろう

勾玉作り教室　10月20日(土) 9:30～11:30
耳飾作り教室　10月20日(土)13:30～15:30
貝輪作り教室　11月23日(祝) 9:30～11:30
編布作り教室　11月23日(祝)13:30～15:30

考古学実習

縄文食体験　10月27日(土)
縄文クッキーや縄文鍋作って
秋の味覚を楽しみましょう

文化財講座

11月6日(火)「縄文貝塚研究の歩み」　山口慶一
7日(水)「竪穴住居研究の歩み」　及川良彦
8日(木)「近代考古学研究の歩み」　福田敏一

都内最新発掘事情

現在、当センターが行っている都内の主な発掘調査遺跡です。見学にあたりましては、今後予定しております「見学会」等をご利用ください。

西ヶ原貝塚(北区)縄文時代後期の貝塚

明治時代にすでにその存在が確認されている都内を代表する貝塚の一つです。貝塚全体は東西約150m、南北約180mとかなり規模の大きいもので、貝塚からはハマグリやヤマトシジミなどが多く見つかっています。

道合遺跡(北区)弥生から古墳時代の集落跡

赤羽台団地内の遺跡で、これまでに弥生時代から古墳時代の住居跡がすでに60軒以上発見されており、かなり規模の大きい集落跡があったようです。住居跡の中には火災にあったものも多く、土器などの当時の生活道具が発見されています。

港区No.149遺跡(港区)江戸時代の屋敷跡

環状第2号線の工事に伴う新橋-虎ノ門間の約1kmにわたる区間を調査しています。本地区は、江戸時代に「芝愛宕下」と呼ばれた地域で、中小の大名および高級旗本の屋敷が軒を連ねていた様子が徐々に明らかにされてきています。

夏3.0親子体験キャンペーン　報告

今年の夏も親子を対象とした各種の体験教室を開催した。「縄文土器作り教室」親子で一日かけて製作した縄文土器。半月乾燥させた後の8月10日、遺跡庭園内で野焼きを行った。当日は35度を超える真夏日の炎天下、大量の薪をくべ天を焦がす炎で一気に焼き上げる。太陽と炎、夏の野焼きは地獄でもある。かつて縄文人は生きるために土器を作った。そして現代人は夏休みの自由研究のために土器を作る。これも生きるため。ただし、賢明な縄文人は、決して真夏に土器焼きは行わなかっただろう。今回もまた無事に夏休みの宿題を持ち帰っていただくことができた。

そして「火起こし教室」汗だくになって火をおこす。必死に息を吹きかける。青白い煙が湧き上がり、突然火が起きる。その瞬間、彼らの目は明らかに輝き、そして驚きへと変わる。実際に体験したもののみが得ることのできる達成感と満足感。毎回体験教室の参加者から聞ける言葉がある。「楽しかったです」。「おもしろかった」。その時心の底から自然に出てきたありのままの言葉。たとえそれがたった一人だけの言葉であったとしても、その一言で今までの苦労は吹き飛ぶ。私たちは参加者の感動で生かされていることを改めて知る。そこには参加者の数だけでははかり知ることのできない確かなものがある。

たまのよこやま71　2007年9月30日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒206-0033 多摩市落合1-14-2　TEL 042-373-5296　http://www.tef.or.jp/maibun/